Shorter Communication

国語の試験問題を読む

「共通１次」を読書すること(国語はおもしろい)

Why Not Enjoy the Literature Exams？

荒井康全 2021/10/27

Yasumasa Arai
194-0002 Minami-Tsukushino,Machida,
Tokyo,Japan
E-mail: araraiypol1a@ozzio.jp

Outlines: He has constantly payed his focus on yearly unified nation-wide exams for university entrance qualification. This is a collect of this author's short essays to commentaries on the problem issues, particularly with respect to the examination session of Japanese con-temporal literature writings as materials.

keywords: commentary. con-temporal literature, Japanese, university exam, problem material

概要；筆者はほぼ各年に大学共通一次試験の国語科の課題文に焦点をあて、感想を記してきた。134これをあらためて、集合としてみると現代社会がかかえる本質問題としての視点のスペクトルがあきらかに浮上しているようでもあり、時代のエヴィデンスをみることになるようにも思える。一方、筆者は国語科目が各人の本質思考への素養への啓蒙・啓発性に基本であるとするも、何故か、その逆になってしまっていることに危惧しているひとりである。
キーワード：現代文、本質問題、時代エヴィデンス、啓蒙素養

134 朝日記 180121 表紙と目次偶感「共通１次」を読書すること(国語はおもしろい)追加版 2020・3・2版
https://blog.goo.ne.jp/gooararai/e/e73c348b7a4128ecb4f00445189eb2e3

はじめに

試験というのは、自分が受けるのでなければ気が楽なものです。問題を解くとなるとこれはまた別の問題で、たぶん剣術とおなじで試合に向けた鍛錬がないと多分だめであろうと思います。　限られた時間内で処理する集中力が鈍ってしまっているからです。入学試験は人間の知への鍛錬からの力量を競う戦場であります。　ひとの将来への門戸をきめる神聖さに対しては、余人は深い敬意と成功への祈りさえ共有していると思います。　余人にとって、受験者との個人的な関わりがそのときどきになくてさえ、そこで何が問われているかを知ることは、その公正・適正さを支える基盤にはなっていると思います。　入学試験問題は、見方を代えれば、その時代での人類社会知のすべての切り口の集合体でもあろうかと、言えます。　そういう知的な塊として、余人が、読書と同じように、スクーリングを受けると同じ次元でみると、あたらしい価値が生まれてくるような感情があります。それによっての、知的な刺激がある。きっと余人にもおおくのことを語ってくれる教材とみることもできるなあと素朴に感じています。　そういうおもいもあって、1980 年ごろから、毎年この時期の新聞の朝刊を開くのがたのしみとなっています。　そして自分なりの切り口をどこに求めたかといえば、当面とはいってもすでに長くなっていますが、不得意な国語科でした。それはなぜかを考えるのが課題動機です。　筆者個人にとって、それぞれの設問において、題材の文がおもしろく、また読む者へのものの本質思考への啓蒙・啓発性があるのに、何故に、その逆になってむしろ非啓蒙・非啓発的とさえなってしまっているのではないか危惧しているひとりである。

それは個々の設問を入ると、思考することへの新鮮さが消えてしまうか、ときには単に回答者の注意力を貶める’ひっかける‘設問でさえ満たされる。そこでは、反射中枢系の判断が優勢に占め、本質的な意味を感じ、考えを促す大脳系の判断ことが少ない。　また、内容の理解を助ける手段としての文章構文などについての形式的理解は大事ではあるが、これも注意力を貶める問に偏ってしてしまっていている。結果として、国語コンプレクスのまま、心理的には忌避感を抱かしめるのではないかと、不思議な世界を眺める思いであります。されば、如何にするかとなりますが、筆者はこれを共通課題として、世にコミットする昂揚感は目下ありません。　ただそういう問題意識を意識の片隅において、市井の一個人として、読書源としてこれをありがたく享受し、常日頃の自分自身の固有の課題への啓発意識現象とし、捉え考えてみようと思っています。そういう意味での日記的な記録を「徒然こと」と題して記述しています。

さて 2016 年から 6 年が経過した。筆者はほぼ各年に課題文に焦点をあて、感想を記してきた。この感想をあらためて、集合としてみると現代社会がかかえる本質問題としての視点のスペクトルがあきらかに浮上しているようでもあり、時代のエヴィデンスをみることになるようにも思える。また素朴に興味ある読み物でもある。人形や妖怪のキャラクター化など虚構言述的な現代分析哲学からの中心話題の色彩が濃いと受け止めた。一方個人的にはレジリエンス、エントロピーや非平衡など物理学系の現代非線形・非平衡熱力学からの社会

科学的発想刺激的な内容のものが比較的多いことに出題の傾向を覗き見るおもいがあるが受験生はあまり当てにはしないでほしい。

目次

1. 1. [135]
2. その２　（２０１７年）「『怪獣ゴレム』」[136]
3. その３　（２０１６年）「『キャラ化する／される子供たち』を読むこと」[137]
4. その４　「(2020 年)　ことしの国語問題を読むこと」[138]
４.１朝日記 200229 徒然こと　レジリエンスについて(2020 年の大学入試センター試験国語問題から)[139]
４.２朝日記 200229 徒然こと　「動的平衡とエントロピー」今年の都立高校入試の国語問題から[140]
４.３朝日記 200229 徒然こと　機会均等と自由意志そして個人について」2020 年の東大入試の国語問題から[141]

～～～～～

1. その１　（２０１８年）「 共通１次試験の問題を読むこと」[142]

（徒然こと１　共通１次試験の問題を読むこと　（国語科））[1]

共通一次試験はこのまえの土曜日 13 日からでしたね。翌朝の新聞に問題と正解が好評されますが、いつのころからか、それを見るのが、習慣になって、朝日記[2]などでその都度、なにかを書いています。　問題を解くためではなく、読書もしくは資料として考えています。

---

135 その1へ(国語はおもしろい)

136 http://blog.goo.ne.jp/gooararai/e/442ca18d560c1452284613c25aa811c2/

137 http://blog.goo.ne.jp/gooararai/e/f569e2c64eb53251ca6b599a9838e2af

138 朝日記 200229 ことしの国語問題を読むこと
https://blog.goo.ne.jp/gooararai/e/9503cf0297e8fbb2c3ad2fd3916f4c17

139朝日記 200229 徒然こと　レジリエンスについて(2020 年の大学入試センター試験国語問題から)

140 朝日記 200229 徒然こと 「動的平衡とエントロピー」今年の都立高校入試の国語問題から

141 朝日記 200229 徒然こと 2020 年の東大入試の国語問題から「機会均等と自由意志そして個人について」

142 朝日記 180121「共通 1 次」を読書することその1(国語はおもしろい)
http://blog.goo.ne.jp/gooararai/e/e73c348b7a4128ecb4f00445189eb2e3

その焦点としては、苦手な国語に置いています。問題を解こうとすると、癪の虫を起こすのであくまでも読書案内としてみます。ことしは以下でした。
問１　現代文
有元典文・岡部大介　「デザインド・リアリティ　－集合的達成の心理学」から一文
問２　現代文
　井上荒野　小説「キュウリのいろいろ」
問３　古文
本居宣長　「石上私淑言」（いそのかみのささめごと）　問答での和歌論
問４　漢文
　李トウ＊　「続資治痛鑑長編」から
＊トウ（壽の下に然の下の点四つ）。

徒然こと２　　問１「デザインド・リアリティ　－集合的達成の心理学」についての感想と所見
　この出題は、フィールド・デザイン論からの著述からの引用である。
「一般にデザインということばは、ある目的を持って意匠・考案・立案すること、つまり意図的に形づくること、その形づくられた構造を意味する、これまで、私たちはこの言葉を拡張して用いてきた」とし、それに加えて　ものの形ではなく、「ひとのふるまい」と「世界のあらわれ」について用いてきたという。定義として「デザインを人工物とふるまいとの関係として表した新しい古典ノーマン氏を上げるが、そのなかでも定義がみつからない。著者は、その試みに、その考えかたを紹介して概念を提示しようとする。
さらに語源としてのデザイン、そのプロダクトとしての「人工物化」そして「秩序」への再編成へと、以下のような項目（keyword）を上げて、論をすすめている。
＊Design,　ラテン語源としての De signare,　意味としての自然環境への刻印　to mark 空間と時間の区分　それに人間が手を加えること。
＊Artificially ,「人工物化」,「再人工物化」
＊Order「秩序」　再秩序。
＊Meaning と Value,　異なる「意味」と「価値」に再編成。
＊Affordance　例　コヒーカップ；茶碗に取手のついたもの。著者はつぎの例をあげて人工物による便宜性 Affordance の向上による環境変化を強調していく；「知覚可能な現実を変化させ、さらに相互反映的に」新しい現実を生み出す。自転車、電話、電子メール、・・・
これは「文化的意味と価値に満ちた世界」であり、　それはさらに文化的進化していく。
「異なる現実が知覚され、それはすでにデザイン以前と同じくふるまえるような同じ現実ではない」。
さらに例として本にページ番号をおく意味を人工物による環境による「記憶」活動の効率化や便宜性が飛躍化としてあげる。

その結果、人間社会としての新しい「ふるまい」や「あらわれ」の違いがあらわれ定着すると説明する。さらに、「人工物」環境の変化によって、そのときどきの行動のための装備は、大衆化されデフォルト化されると展開する。これらは、人工的手段のもつ意味と価値の到達「射程距離」がかわることを意味するものであえろうか。著者は、そういう意味での環境適応への「文化心理学」の在り方を主張している。たしかに、その環境での人間行動への便宜性をふくめて適応していく配慮としてのメンタルな特有な問題はありうるであろう。
さらに、著者は、「買い物の際の精算」での計算手段の進化と、人間の社会心理への変化を主張しようとしているが、なにをいいたいのか具体的な論の展開はみせていない。　その意味で、人工物手段 mean によって消滅することのない、変化をうけることのない目的 end への人間の価値意識とそれを援ける知性として、その合理性や道徳性に触れるべきであろう。著者が否定している本来の「原心理」の存在は、依然として意味をもつとみる。
一方、物理的な時・空容量の拡大による欲望や願望の変化に対応して、観念上の時・空間での人間の行為への意味や価値の変化はありうるかもしれない。進化適応という意味でかわるかもしれないが人類は共存・生存について、注意深くそれを観察して、本来の有り方への修正や補正し吸収をしていくとみる。適正なる Governance 力の要請である。
この意味で、ここでも手段 mean が変わっても、価値目的 end への意思能力 consciousness は基本的にかわらないという仮説を採用していくことになろう。
筆者の希望的所見としては、これまでの人類史的文明過程で、認知してきた人間としての本来的資質や特性を変えてしまうような本質的に変化がおきないと言明しておくものである。
最後に付言しておきたいことは、この論の冒頭で、著者は、自分が教鞭をとる大学であろうか、その講義を例にとっているところは、一見わかりやすいので目をひく。講義のはじめに、何を理解したかあとでテストすると宣言すると、受講側は意識を集中させさまざまな対応をとる説明する。この切り口から「意味」と「価値」からの創造としてのデザイン論を展開している。　著者は、問題文の最初で受講側に課したのは「講義の意味」として「記憶すべき知識群」を引き出す講義側の実験であったことをたね明かしをしている。しかし、講義室で、何を話す、何を考えるという主題と趣旨を与えないまま、あとでテストとして課するという発想はいかがなものであろうか。これから始まる講義のなかから、その「意 味」と「価値」をみずから掴めとなれば、講義側は受講側にたいしてフェアではないような気がする。目前にあるものからの問題をとらえるとしても、問題の対象化への抽象化過程が必要であろう。これを行うのは経験や理論やパラダイムによる援けが必要であろう。　講義を受けることはその部分を求めているからともいえるのではないであろうか。
酷な評となるが、理念や理論についての論述展開の背景不足が、この論説の内容を浅くしているように思ったのである。その意味で、共通一次の問題の材料としては、受験生は困惑したであろうし、啓蒙性も、失礼ななながらない。
もし、採用するなら、この論説のどこが問題かを、答えさせるのなら意味があるとおもう。
個人的には、設問に取り組む意味を感じない。むしろ、共通一次の国語設問は、人間思考へ

有害とさえ思っているので避けている。なぜなら、折角の原文のもつ意味を、受験者の注意力や構文上のテクニックに偏重した設問になっていると判断したからであり、現に目を通してみるとその感がつよい。考えることの充実感を与えないことが、若者に国語科に魅力を与えない結果になっているのではないであろうか。　諸賢の意見を敢えて問うものである。

～～～～～～

2. その２　（２０１７年）「『怪獣ゴレム』」）

おはようございます。きょうは怪獣ゴレムです

徒然こと　センター入試　国語科目**[1]**

ここ年々になるでしょうか。毎年、センター入試の問題と解答が発表になると駅のスタンドに買いにいきます。　購読している日本経済新聞でもよいのですが、活字が小さくて諦めます。それでもっと字の大きい一般紙を購います。　私のお目当ては、国語科目です。どの科目でもよいのですが、問題を解くというのではなく、問題を「読み物」として楽しむことにあります。しかし、受験生、あの年代の若いひとたちの集中力というのは、猛烈で、むかし恩師が「神がかかっている」といわれていたことがなるほどと感嘆します。

国語科の今年の問題の題目は以下でした；

１．現代文

「科学コミュニティ」（小林伝司）

２．小説「秋の一日」（野上弥生子）

絵の展覧会の様子を女性らしい感性での文章でかたる

３．古文：木草物語

貴人がその仕えの家人の屋敷に立ち寄り、その庭園の木々、花草をめでる。間垣の向こうにある屋敷の若い尼に淡い思いをし歌をおくり、それとなく振られる話。

４．漢文：新井白石『白石先生遺文』

江戸の都市として興隆・変化について正しく記録しておくことの意味を語っていますが、読み違いかもしれません。

現代文の「科学コミュニティ」に目が留まり、多少興味をもちましたので以下にご紹介します。

徒然こと２　センター試験国語は怪獣ゴレム

大学入試センターの国語設問　現代文「科学コミュニティ」からの問題に付き合ってしまっています。ちょっと面白そうであったので、調べると英国 Wales の Cardiff 大学 H. Collins と T.Pinch の the New Science Waves を材料にしていることを知ります。科学技術を旧約聖書にでてくる巨大な怪獣 Golem になぞらえています。人間が創った怪物。かれらは忠実に主人からのことはきくが、ときに凶暴になる。この Golem を如何に、誰が調教するかの話です。　Collins は、これをするのは社会系と科学系に精通する科学社会学 Science &

Sociologyの専門家の登場に期待します;'Interactional Expertise' の必要性に言及していきます。同時に、彼を終始実地知識で支える協力専門家 Cooperation Expertise との組みを想定します。Collins は社会哲学者ですが、かれは実際に物理学の大課題である重力波の検証実験のグループに、人文系の研究者としてとして参加します。この過程で、この物理の知識素養と実験を経験し、研究の社会的意味と展開の在り方をその視点から予測研究をするというものです。このレベルの話で思い出すのは、日本の企業では主として、技術者の新人を三交代の現場勤務につかせていることをおもい出だします。これを、文系の新人にも経験させ、製造現場経験を徹底的に経験させようとするところまで拡張する。　最近の企業の状況について調査不足ですが、ここまで読んできて、Collins の言っていることは、日本での習慣からいうとそう特異ではないようにおもいました。日本では結構伝統的にある現場第一の仕事モラルがいまも生きていている、否あれかしと思うものですが、怪しいですね。分業的な機能システム主義が戦後特に、怒涛のごとく米国から移入して極度に機能主義になっているのが現状かもしれません。（機械製図ができない機械技術者の時代です。）
英国では如何なのかと考えます。これを英国通の友人に訊きたいとおもいます。たとえば製造業では、どうなのか、目下、私は知識不足なので話がすこしピリッときませんね。　ただかなりはっきり言えることは、日本の社会の文化においては、いつのころからか、文系と理系という系譜が、なにか線を引いたように分かれているとおもいます。結局、本来、線を引いてはいけないのに、暗黙の前提で教育文化をそうしてしまっている。数学がきらいだから理科にいかないといった教育文化です。また、多くの場合、組織を動かすのは文系だと決めてかかっている。それはそれでよいのですが、モノやことのひとつひとつ論理的に科学的な思考、その知識やさらにその技術、それを扱う現場の状況について、別な表現をすれば、P計画－D実行－Cチェック－A修正などが、責任組織行動として信頼に値する筋が通ってなく、片側が他の側の専門に丸投げしてしまっている。現象や事態の意味するものを自分の頭脳回路を通さず、管理や規範ルールとしてのみ適合しているかどうかの形式的なもので、判断して意志決定していく。理系は、経営のその意志ということで、忠実に従って、ただことに当たる。そういう構図です。それ以上考える必要もない。どんどんいけとなる。そうすると、気が付いたときには、目の前に巨大な怪獣「Golem」が存在している。そういう警鐘否、現実問題であろうとおもいました。　命令する側も実行する側も従事している仕事の対象自体について考える組織判断の機能を失ってしまったということになります。ことしのセンター試験国語の現代文の問題はそういう内容のものでした。
ところで、このようなおもしろい内容の材料でしたが、試験設問を読んでみてなんと、非啓蒙的なことよと落胆しました。これでは論理的な書を読むことを本能的に嫌いにさせること必定です。　設問が、単に構文的な理解になってしまって、用語上のちょっとして不注意が注意散漫で　×といったものになることを知ります。　ここでも受験判定を機械的にすすめることをもっぱらよしとする「Golem」が存在している。国語科が面白い、刺激的な学習であることに意を配って、一歩踏み込んで考えるひとがいないのだなと痛感しました。た

ぶん、この出題者も無力感を感じているのではないかとおもいました。
参考 文献
Interactional expertise については以下をご覧ください；
From Wikipedia, the free encyclopedia
https://en.wikipedia.org/wiki/Interactional_expertise

コーリンの　The Third Wave of Science Studies については以下をご覧ください：
Studies of Expertise and Experience
H.M. Collins and Robert Evans
http://journals.sagepub.com/doi/pdf/10.1177/0306312702032002003

コーリンの紹介は以下をご覧ください：
Harry Collins
From Wikipedia, the free encyclopedia
https://en.wikipedia.org/wiki/Harry_Collins

The Golem: What You Should Know About Science (1993).[2]

怪物「golem」については以下をご覧くさい：
https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B4%E3%83%BC%E3%83%AC%E3%83%A0
作った主人の命令だけを忠実に実行する召し使いかロボットのような存在。運用上の厳格な制約が数多くあり、それを守らないと狂暴化する。
Collins 怪物「Ｇｏｌｅｍ」の本についてアマゾンの広告です；
The Golem: What You Should Know About Science (Canto Classics) (ペーパーバック)
Harry M. Collins (著), Trevor Pinch (著)
https://www.amazon.co.jp/gp/offer-listing/1107604656/ref=tmm_pap_used_olp_0?ie=UTF8&condition=used&qid=1484554683&sr=1-1-catcorr

～～～～～～

3. その３　（２０１６年）「『キャラ化する／される子供たち』を読むこと[143]
朝日記 180121 共通 1 次国語を読書する　その３　（２０１６年）「『キャラ化する／される子供たち』を読むこと

143 **http://blog.goo.ne.jp/gooararai/e/f569e2c64eb53251ca6b599a9838e2af**
朝日記 180121 共通 1 次国語を読書する その3 （2016年）「『キャラ化する／される子供たち』を読むこと

徒然ごと　　2016 年　大学入試センター試験　「国語」をながめること[1]
ことしも　終日たのしませていただきました。
受ける身になれば、嫌いな科目も　ただながめるだけなら面白いのが国語科目です。そのときどきの時代の息を見出すおもいがあります。さて、書きます
　2016 年　大学入試センター試験　「国語」をながめること
土井隆義　『キャラ化する／される子供たち』　リカちゃんを設定した多様な人間関係状況の行動を見て、そのどれか（複数）を選好し、自分のアイデンティティとすることについて。
佐多稲子　『三等車』　戦後間もない生活情景を東京発鹿児島行き列車にて描いた短編。
今昔物語集から　ある男、鬼に唾をかけられ透明人間になって困ったはなし。
漢文　蘆 文弨 『抱経堂文集』　母を思う一念の息子のこと

このうち、土井隆義　『キャラ化する／される子供たち』を触れます。
　人形キャラクター　リカちゃんがいまも人気です。現在は第 3 世代で、これまで 5 千万の数にのぼるそうです。このキャラクターを主人公にして人間関係の様々、多様な状況環境、つまりドラマのなかに置きます。そのときにキャラクターがとる思考や行動を可能なかぎり発生させるとします。　いわばシミュレーションです。　そして、その結果はリカちゃんとキャラクター群の集合として用意されたとします。
こういう作品群を「次創作」とよんでいて、　現場では「やおい」とよんでいるらしいです。
子供たちは、（たぶん若い人たちは）　その「やおい」で顕れたリカちゃんのキャラクターを選好して　「外キャラ」として自分の同定（アイデンティファイ）し、仲間への了解を求めるものらしい。選好した「外キャラ」が相互に矛盾していても、とくに問題をしない。その移行を「キャラリング」と呼んでいるらしいです。「外キャラ」というのがあるから当然「内キャラ」が想定されるわけですが、ここでの文章では深く触れません。
　原文のなかで「人間関係の外キャラの提示は、それぞれの価値観を根底から異にしてしまった人間どうしが、予想もつかないほど多様に変化し続けるなかで…コミュニケーションさせていく技法」として位置づけます。　たとえば、トランプゲームで配られたカードですきな何枚かを残し、これを表示して合コンするようなものかなとおもいました。
この話は、いろいろ考えさせられます。　あくまでも用意された「やおい」のきわめて感覚的な選好であること。　手元に残したカード群をデータ（あるいは現象）として　それがなにを意味をしているか、自分の内面（「内キャラ」）とのつながる目線はこの文からは語られないことが印象的でした。そういう面では　そういうことを考えさせる良い問題であったのかもしれません。　各設問については、本能的に、読まないことにしています。多分、筆者の「内キャラ」からくるものですが、お赦しください。

～～～～～～～～

4. その４　「(2020 年)　ことしの国語問題を読むこと」[144]

４.１朝日記 200229 徒然こと　レジリエンスについて(2020 年の大学入試センター試験国語問題から)[145]

徒然こと　2020 年の大学入試センター試験国語問題から
レジリエンスについて
河野哲也『境界の現象学』による
（読売新聞朝刊　2020 年 1 月 19 日）
問題は、近年さまざまな分野で応用されるようになったレジリエンスという概念をとりあげ、その現代的意義を考えさせるものであった。
まず、冒頭に環境システムの専門家であるウォーカーの比喩を紹介しているので、話をすすめるために以下に置く；
「あなたは　港に停泊しているヨットのなかでコップ一杯の水を運んでいるとしよう。そして、同じことを荒れた海を航海しているときに行ったとしよう。港に停泊しているときにコップの水を運ぶのは簡単である。この場合はできるだけ早く、しかし早すぎないように運べばよいのであって、その最適解は求めやすい。しかし、波風が激しい大洋を航海しているときには、早く運べるかどうかなど二の次で、不意に大きく揺れる床の上で転ばないでいることの方が重要になる。あなたは、膝を緩め、突然やってくる船の揺れを吸収し、バランスをとらねばならない。海の上では防災要因を吸収する能力を向上させることをあなたに求める。すなわち、波に対するあなたのレジリエンスを向上させることを求めるのである。
そして、レジリエンス resilience の定義を、擾乱を吸収し、基本的な機能と構造を保持し続けるシステムの能力として括る。
まず、システムとしてその能力としてふたつがあげられる。ひとつは目的に対して最適解への能力、もうひとつがそもそもシステムとしての基本的能力を保持制御するかであり、レジリエンスは、後者の課題として論者の焦点を設定し、その概念をさらに詳しく論じていく。
まず、この概念の出生は、物性科学にあって物質が元の状態戻る「弾性」のことを意味する

---

144 **朝日記 200229 ことしの国語問題を読むこと**
https://blog.goo.ne.jp/gooararai/e/9503cf0297e8fbb2c3ad2fd3916f4c17

145**朝日記 200229 徒然こと　レジリエンスについて(2020 年の大学入試センター試験国語問題から)**

https://blog.goo.ne.jp/gooararai/e/cd684f3250718d4af768a0210a37f00a

と語る。
（時間的に変化する外力つまり、擾乱からの熱力学平衡状態へ収れん性問題ともいえる。考える現象の平衡点の探索は工学的な制御問題として意味があり、現代では、不可逆状態熱力学において、動的エントロピー流の最大生成原理として取り扱われている。（荒井））
この発想が 60 年代に生態学や自然保護運動の文献に用いられるようになった。そこでは、生態系が変動と変化に対して自己を維持する過程という意味に使われた。しかし、ここで言う「自己の維持」とは単なる物理的な弾力のことではなく、環境の変化に対して動的に応じていく適応能力のことであるとする。
著者は、回復力（復元力）という意味で、これと類似な概念としての、サステナビリティにふれる。　ここで回復とはあるベースラインや基準に戻ることを意味するが、レジリエンスでは、かならずしも固定的な原型が想定されていない。絶えず変化する環境に合わせて流動的に自らの姿を変更しつつ、それでも目的を達成する概念である。均衡状態に到達するための性質ではなく、発展成長する動的過程を促進するための性質であると言い切る。
（不可逆性熱力学としてのアナロジーから類推すると、外力が、いま考える系のある熱力学的平衡の保持の擾乱量の限度（閾値）を越えてしまう状態が想定される。ここでは、前述の動的エントロピー流の生成最大原理はもはや適用されず、あらたな擾乱過程にはいることを意味している。ここでは外力を取り除いてももとの状態へは、系が自律的にもどる（つまり弾性）ことはできない状態となる。この状態を非線形熱力学状態もしくは、複雑系熱力学状態として現代物理工学の主題の領域となっている。制御という観方からみれば、時間的な変動に対してのシステムの安定点の制御ということになり、その意味でレジリエンス問題である。（荒井）　）
著者の説明は、さらに、一貫して社会科学的な領域に深掘り展開していく。
サステナビリティそのものがたとえば環境保護において、もとの自然状態という固定点に回帰するのではなく、冒頭の航海中でのコップ運びのような荒ぶる外力に対して、たとえば、適度の規模の擾乱としての山火事の存在がレジリエンス例として意味があることを示唆している。
このような「適度の擾乱」という概念におよぶと必然的にレジリエンスと対になる概念として、ひとつは「脆弱性(vulnerability)」を、ふたつめは「冗長性(redundancy)」をあげている。　前者はちょっとしたことを感じ取るセンサー感度で、後者は、その逆で、ピリピリせず、意識的に間合いを取って感じ取るセンサー感度といっておくが、ここでは深入りしない。
「レジリエンスは、複雑なシステムが、変化する環境のなかで自己を維持するために、環境との相互作用を連続的に変化させながら、環境と柔軟に適応していく過程のことである」として、結ぶ。
このあと、著者は、「ニーズ」への対応で、社会的弱者を例に、方式のお仕着せでなく、生命自身の自律性と能動性を尊重するという付言をする。

本徒然こと（荒井）の感想としていかにのべたい；
（ここまでの展開として、レジリエンスとしての確たる方式はないことを暗に披露するが、それがレジリエンスということを主張するのであろうか）
（受験生の若い人たちはこの文章からなにを受け止めたか、正直、気の毒な感がある。
視点としてのレジリエンスは、人生の態度として参考にはなるが、具体的な方法論的な展開については、なんら示唆的でなく、空虚であるといえよう。空虚と答えるのが正解であろうが、各問を見る気をおこさせない。）
ただし、上記で（　）での筆者のコメントを如何にまとめておきたい。
意味ある方向として読者の意識を期待するものである。
1.（時間的に変化する外力つまり、擾乱からの熱力学平衡状態へ収れん性問題ともいえる。考える現象の平衡点の探索は工学的な制御問題として意味があり、現代では、不可逆状態熱力学において、動的エントロピー流の最大生成原理として取り扱われている。（荒井））
2.（不可逆性熱力学としてのアナロジーから類推すると、外力が、いま考える系のある熱力学的平衡の保持の擾乱量の限度（閾値）を越えてしまう状態が想定される。ここでは、前述の動的エントロピー流の生成最大原理はもはや適用されず、あらたな擾乱過程にはいることを意味している。ここでは外力を取り除いてももとの状態へは、系が自律的いもどる（つまり弾性）ことはできない状態となる。この状態を非線形熱力学状態もしくは、複雑系熱力学状態として現代物理工学の主題の領域となっている。制御という観方からみれば、時間的な変動に対してのシステムの安定点の制御ということになり、その意味でレジリエンス問題である。（荒井）　）
3.　熱力学的平衡から遠く離れた現象は、自然環境界では、むしろ当たり前の現象であろう。文明が科学技術をもってこれを　熱力学的動的平衡限界に収めているとみることもできる。しかし、「航海上の突然の揺れ」のように水の入ったコップをこぼさないようにする複雑系（非線形系）へのレジリエンスは、予測技術としても、制御技術としても人類は未達で、挑戦中である。その意味では、現代文明はつねに未知のカオスとの闘いであることの
意識の共有化が要請される（コロナウィルスの克服はまさに、恰好の課題である。）
4.　方法論上の糸口は、注目現象とその相関性を把握する統計解析が先行するであろう。
巨大データの解析がひとつの力を与えてくれることを期待する。　つまりＡＩ技術の積極的活用といっておきたい。
5.　そして、上述の非平衡系（複雑系）の科学技術理論の進歩を期待するものである。
～～～～～
４.２ 朝日記 200229 徒然こと　「動的平衡とエントロピー」今年の都立高校入試の国語問題から[146]

---

146 **朝日記 200229 徒然こと 「動的平衡とエントロピー」今年の都立高校入試の国**

徒然こと　今年の都立高校入試の国語問題から
動的平衡とエントロピー
　福岡伸一　「動的平衡３」による
　（読売新聞朝刊 2020 年 2 月 22 日）
エントロピーの現代的な捉え方は、ものごとが時々刻々変化している状態でのそのものごとが、ある秩序をたもっている状態を定量化して考えるものである。大宇宙（大自然）は秩序から混沌へと移行しているのがエントロピーの増大の法則である。その崩壊過程のなかで、あるものごとが秩序を保つための働きをおこなう。生物の生命活動は、その秩序の維持と継承のための働きを行っている。人間社会も広い意味の生存のために秩序の創造、維持と継承をおこなう。われわれはその秩序を価値と呼んでいる。考える対象であるものごとの論理的つまり科学的な秩序の概念がエントロピーであり、もともと熱機関や化学反応に始まる熱力学での中核となる概念であるが、情報システム系での秩序概念としても使われており、経済学など社会科学にその適用領域性の拡大をしている。
以下　本設問本文の要点を上げてみたい。エントロピーの説明としては秀逸である。
要点；
「宇宙の大原則に「エントロピー増大の法則」がある。エントロピーとは、乱雑さのことであり、この世界のすべてのものごとは、時間の経過とともにエントロピーが増大する方向に進む」
壮麗豪華な白亜の神殿
フェルメールの傑作
机の整理整頓にある書類

「価値を生み出すこと、商品を作りだすこと。ビジネスモデルを考案すること。」
「利益を生み出すことは、結局のところ「エントロピーの増大の法則」に抗って、乱雑さ中から秩序を創出することに他ならない。」
「宇宙の大原則に逆らって行う行為である以上―つまり坂を転がり落ちる岩を止めるようなものである以上―　エネルギーがいる、そして、最終的には決して宇宙の大法則には勝つことができないゆえに、止めた岩はまもなく、転がり落ちる。」
「つまり、ありていに言えば、商行為とは、使ったエネルギーよりも作りだした秩序により大きな価値を創造すること、そしてその秩序が再び無秩序に還るまえに、その状態を移転することである。」

「もっとも果敢にエントロピー増大の法則と対峙しているのは，何であろうか、もっとも高

語問題から

度な秩序を維持しているのは私たちの生命体である。」
「私は生命のこの営為を「動的平衡」と名付けた。

「これと闘うため、生命は端から頑丈に作るという選択をあきらめた。」
やわらかく、ゆるゆる、やわやわにつくった。
そのうえで、自らを壊しつつ、作りなおし、更新し、次々とバトンタッチするという方法をとった。」
「この絶え間ない分解と更新と交換の流れこそが生きていることの本質」
「系の内部にたまるエントロピーを絶えず外部に捨て続ける唯一の方法」
「動きつつ、つり合いをとる。これが動的平衡の意味」
たえずずらし、さけ、やりすごす、これでここまできた。宇宙の大原則と対峙しながら。

「つねに動的状態を維持する」
「動的平衡を基本原則として、（大きく）変わらないために（つねに小さく）変わり続けてきたからだ」
「動的平衡において重要なものは構成要素そのものよりも、その関係性にある、」
「構成要素は多機能性であり、異なる役割りを果たしうる、」

「生命の動的平衡は自律分散である。」
「組織もその都度、微調整され、新たな平衡を求めて、刷新されていく。」
「個々のピースは、いずれも必ずしも鳥瞰的に全体像を知っている必要はない、ローカルで、自律分散型で、しかも役割りが可変的である」
～～～～～
４.３　朝日記 200229 徒然こと　機会均等と自由意志そして個人について」2020 年の東大入試の国語問題から

徒然こと　2020 年の東大入試の国語問題から
機会均等と自由意志そして個人について
小坂井敏昌　「『神の亡霊』６　近代の原罪ににより」
（読売新聞朝刊　2020 年 2 月 28 日）
機会均等と自由意志そして個人について　小坂井氏のエッセイが出題された。
原著を読んでいないので問題の文章の範囲内での感想を記しておきたい。
受験者ではなく、単なるひとりの読者という立場ということをお断りしておく。
出典の表題からすると　近代社会でとりこんでしまった原罪としての「個人」を述べたいらしい。いわく、
近代はひとつの主体を誕生させた。それは個人という自由意志に導かれる主体である。

民主主義はその個人よっての成立を前提とする。
個人は、自由意志のもとに、目的を選択し、自らの能力によってその達成を遂行する。そのための機会はその社会において平等が保証されるものとする。
一方、各個人が達成するであろう経済的格差は、当然あり、自由意志の結果として、容認するものとなる。この社会メカニズムの公正さを裏付ける教育制度につぃてであるが、実際には子弟の家庭の経済力によって、社会的格差が固定化してしまっているという。そういう批判が常に存在し、穏健なる態度でいえば制度上は、その是正のために改良がおこなわれていることも事実である。
しかし、ひるがえって、個人というのは、そもそもその理念のとおり、ほんとうに自ら自由意志をもち、自己責任を負う本来としての内部的存在であるかという問いがある。
著者はそれは「虚構」であるという。親からうけた遺伝形質に、家庭、学校、社会などの後天的影響が圧倒し、結局、各個人は外来要素の沈殿物に過ぎないという見解である。
そうなると個人という自律性というのも、その社会背景からくるであろう支配的意識（社会の空気）のなかで共存している、いってみれば平均的個人といった存在ということになる。
ここまで読んできて、このエッセイの落としどころが見えない。だから個人の自由意志と自己責任を否定するでもないし、肯定するでもないが　最後に、個人としての自由の意識について心理的側面にふれる。これは、大仰に個人の自由意志と自己責任といって、それを実現する社会が公正性に問題を含むことは、その個人にとってけっきょく隠れ場を提供する。目的未達の状態について言い訳ができるからである。一方　もし真に公正な社会であれば、未達の状況はひとえに本人の能力に帰すことになってしまい、もう逃げ場がない。したがって、どこかで、不公正な社会を容認して手打ちをしている節があって、じつは、不公正を隠ぺいした社会こそが、この民主主義の現実社会なのであると結んでいる。
著者の表現で「近代が産んだ未曾有の存在」としての「個人」については、社会科学の一方の祖マックス・ヴェーバーにはじまるものである。人間意志の原点としては意図と責任の所在を全て個人に還元するものとしている。「方法論的個人主義」である。この著者は、人間社会へのこの原則に対して本来的な欺瞞性を見ようとしているとみるのは勇み足であろうか。
ちなみにこれに対する原則はフランスのデュルケムにその起源をおく「方法論的集合主義」である。この二つの原則での間の最大の相違点は、社会的責任の最終帰属を個人とするか、集合（たとえば会社や国家）に置くかにあり、いまにおいても決着を見ないことを付言したい。その意味では、原著でさらにかれの言わんとするものに興味をもつものである。
これが今回の国語課題であった。